びっくり エコ新聞

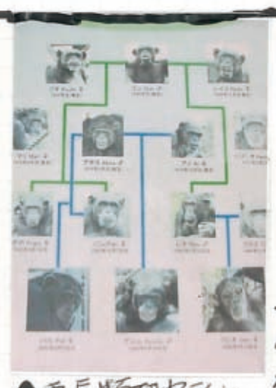
8月11日 火曜日

チンパンジーから見た人との関係

京都大学霊長類研究所を訪ねて

8月10日、愛知県にある京都大学霊長類研究所に行ってきた。ここでは、チンパンジーを始めとする、霊長類の研究がなされており、教授、学生の他に、2つのコミュニティに別れて生活している、13人のチンパンジーがいる。このほかに、京都大学では、熊本県にある施設と合計約70人のチンパンジーが、所属している。しかし、実は、動物園以外で、チンパンジーを飼育をしているのは、ここ、京都大学だけである。

▲霊長類研究所


▲霊長類研究所にいるチンパンジーの家系図

この研究所では、チンパンジーは、野外運動場と屋内の個室を移動して生活しており、また、研究のために、勉強もする。

▲広い運動場。研究所のそばに、昔、ケーブルが走っていた。これは、足の形をしたり、ひらめくなどの現在のジャングルジムになったり、けがをしたりしてパンチくは場所のけがをしたりして

※町は、昔、城下町。山の大きい方が、奥は、この城下町だった。

チンパンジーの研究

1、一個体ベースの認知機能の分析

この実験は「コンピューターの画面にバラバラに表示される、1～9までの数字を順に、タッチしていくものだが、1をタッチすると、残りの数は隠されてしまいます。人の場合、じっくりと見て、数字の場所を覚えてから、1を押しますが、彼らが、1を押すまでの時間は、たった0.07秒なのです。しかもその上、人よりも正答率が高いのです。

2、二個体ベースの分析

この実験では、一方がコインを入れるともう一方にリンゴがおちてくる仕組になっている装置を使って行います。まず一方がコインを入れはじめます。人間なら二人同時にコインを入れるのですが、彼らは、一方しか入れません。すると、コインを入れている方が怒り出し、怒から、他方に催促します。そうすると、もう一方がコインを入れはじめるのです。

3、対面式人とベースでの分析

これは松沢教授が行った実験で、チンパンジーと一緒に、実験室に入り、彼らと対面式で行う実験でその内の一つに、絵描きがあります。この実験で彼らは絵を描くことはできるが、ただ自分が描いた軌跡が残るのが楽しく、人のように、イメージして描くことはできないということが分かった。このようにチンパンジーには人とは少し違うところがあります。

人と似た行動

チンパンジーの行動の中には人と近いものもある。その一つが、母親が子に乳を与えるときに目を合わせることです。その他に、次の写真のようにまるで一家団欒のような

なことをした上の写真のように奥の娘が手前の母のもづくろいをするという親孝行したり、する姿もあり、人に近い一面もある。

日本モンキーセンターの猿たち

ニシローランドゴリラ（オス）

アフリカの西域に生息。この姿勢で体高180cmをこえる。

ワオキツネザル 原猿類

マダガスカル島にのみ生息。しっぽを立てて歩く。ワオキツネザルはしっぽの模様に特徴。

テナガザルの一種

主に樹上で生活し、手だけで枝を渡ることができる。泳げない。しっぽがなく、人に近い仲間

クモザル

主に樹上で生活する。しっぽの先の裏にもがなく、滑らなりように人の手のひらのようになっている。写真上側にいるのがこの群のボスぶら下がってバナナをとっているのはNOでボスと兄弟。

リスザル

主に樹上で生活している。泳げない。せみなどの虫が好物である。

▲現在、飼われているリスザルの家系図

小型のサルであるがしっぽは長い。頭の毛の色は黒から灰色まで様々である。

日本モンキーセンターは、1956年に、サルの研究、野生ザルの保護、教育普及、現在は行っていないが、人の病気の研究のためにつくられた。現在、世界一サルの種数が多い動物園である。また、標本数が約6000個あり、日本で唯一登録博物館になっている動物園でもある。愛知県犬山にあり、来年の10月17日に開園60周年を迎える。